

2023年日本建築学会賞（業績）

分離派建築会の活動を多面的に解明した 調査・研究・展覧会

分離派100年研究会
パナソニック汐留美術館
京都国立近代美術館



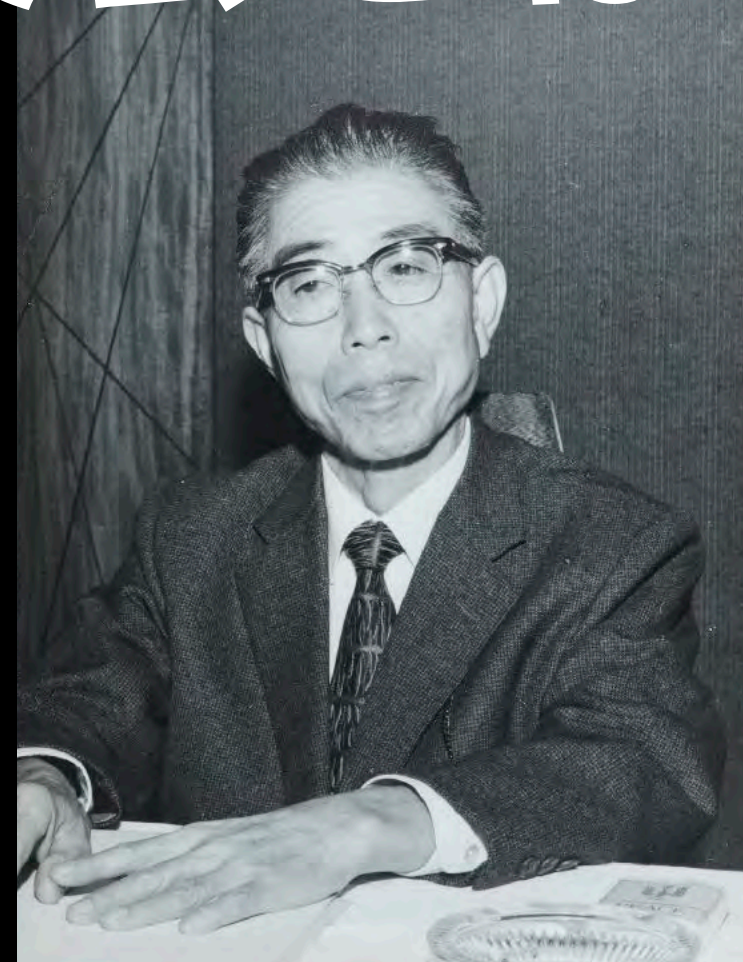
分離派100年研究会 (16名)

- 田路貴浩 (代表、京都大学・教授)
- 天内大樹 (青山学院大学・准教授)
- 市川秀和 (福井工業大学・教授)
- 岡山理香 (東京都市大学・教授)
- 勝原基貴 (金沢工業大学・講師)
- 加藤耕一 (東京大学・教授)
- 河田智成 (広島工業大学・教授)
- 菊地潤 (ifaa会員)
- 近藤康子 (京都橘大学・講師)
- 杉山真魚 (岐阜大学・准教授)
- 大宮司勝弘 (DOCOMOMO JAPAN・事務局長)
- 田所辰之助 (日本大学・教授)
- 角田真弓 (東京大学・技術専門職員)
- 大村理恵子 (パナソニック汐留美術館・主任学芸員)
- 池田祐子 (京都国立近代美術館・副館長兼学芸課長)
- 本橋仁 (京都国立近代美術館・元特定研究員)

分離派建築会とは？



堀口捨己
明治大学建築学科 創業者
茶室研究の第一人者



瀧澤眞弓
神戸高等工業学校教授
大阪市立大学教授



石本喜久治
石本建築事務所 創業者



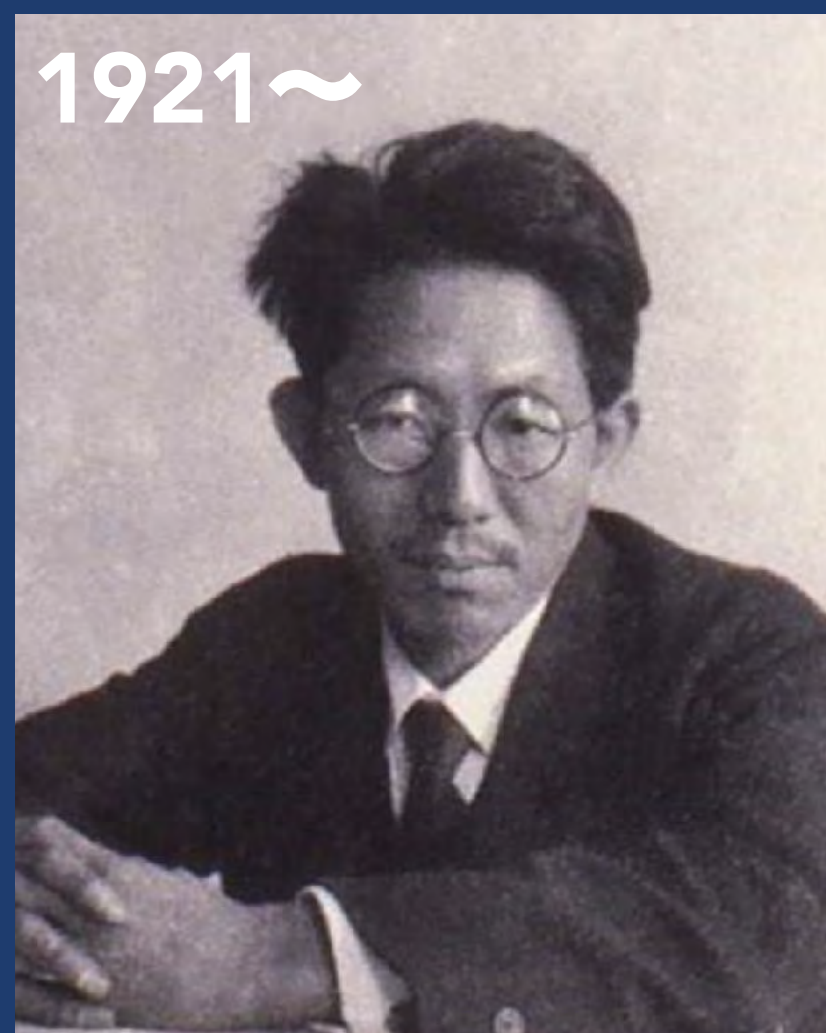
森田慶一
京都大学建築学科教授
西洋古代建築論研究の第一人者



山田守
東海大学建設工学科 創業者
山田守建築事務所 創業者

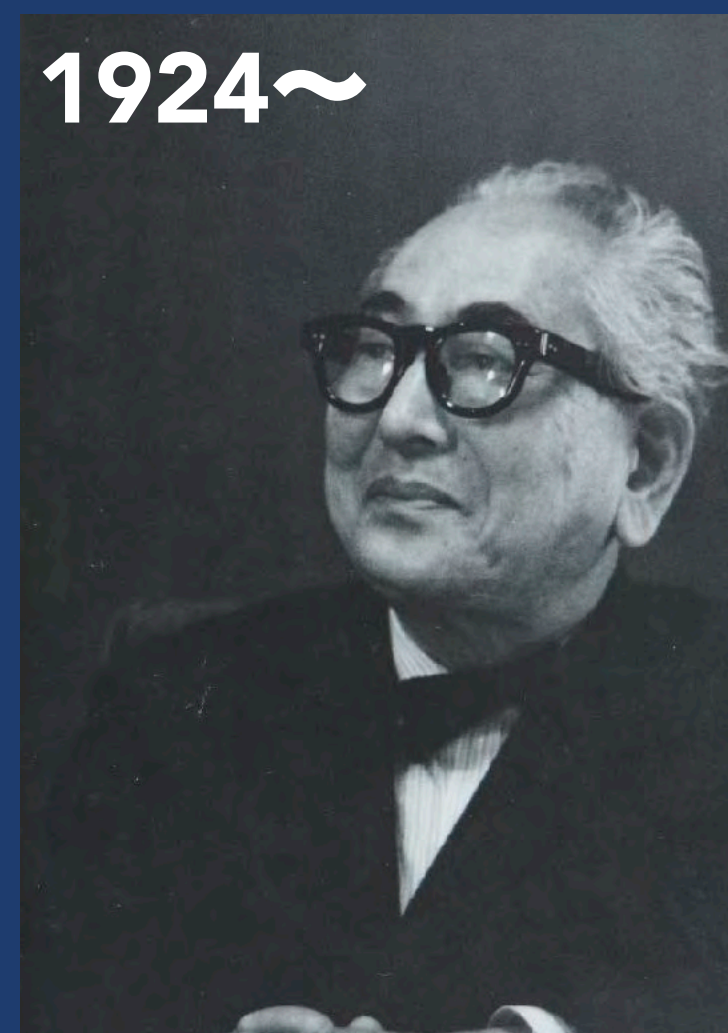


矢田茂
清水組
取締役技師長兼設計部長



1921~

蔵田周忠
武蔵工業大学教授



1924~

山口文象
RIA建築総合研究所 創業者



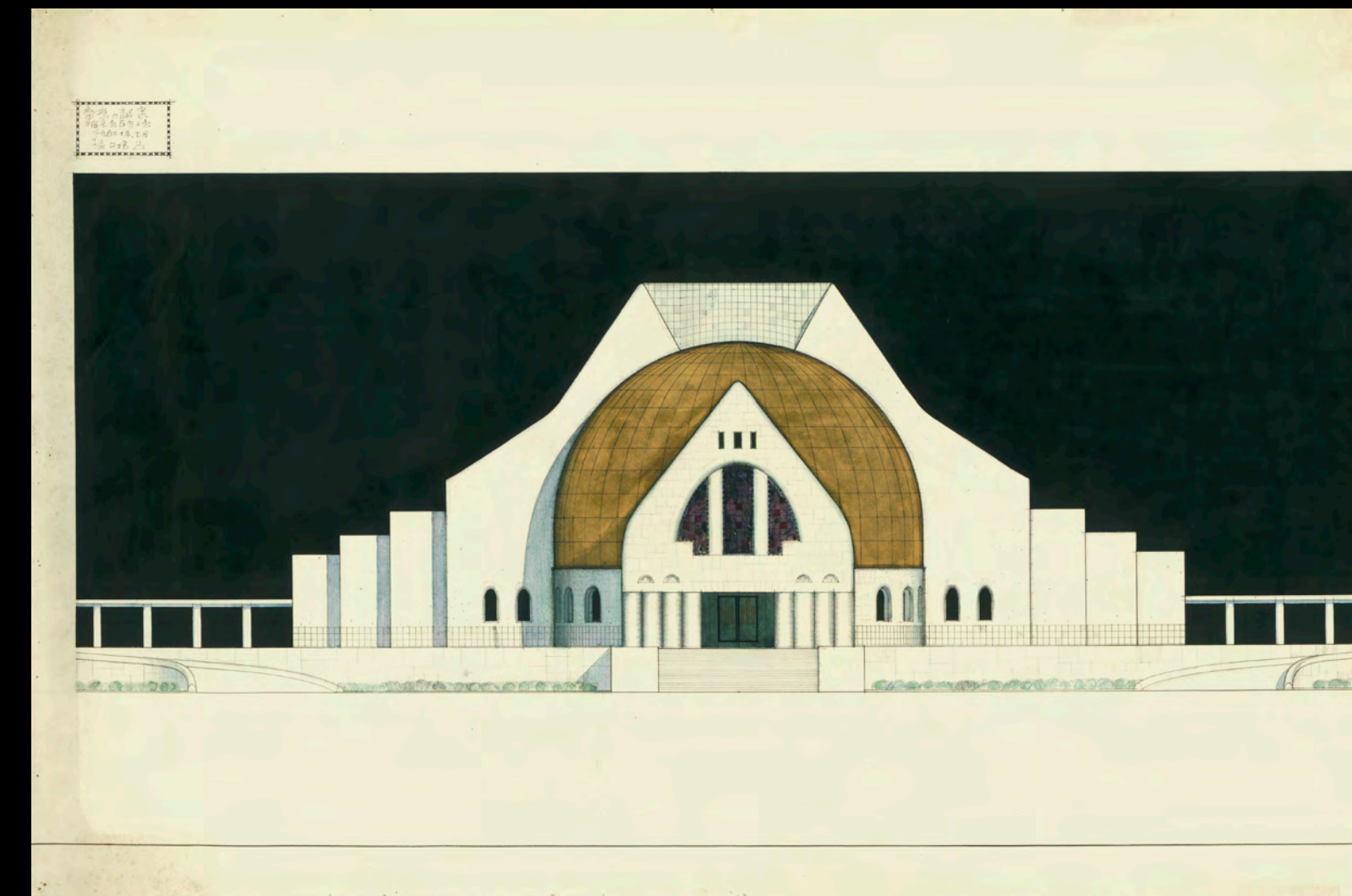
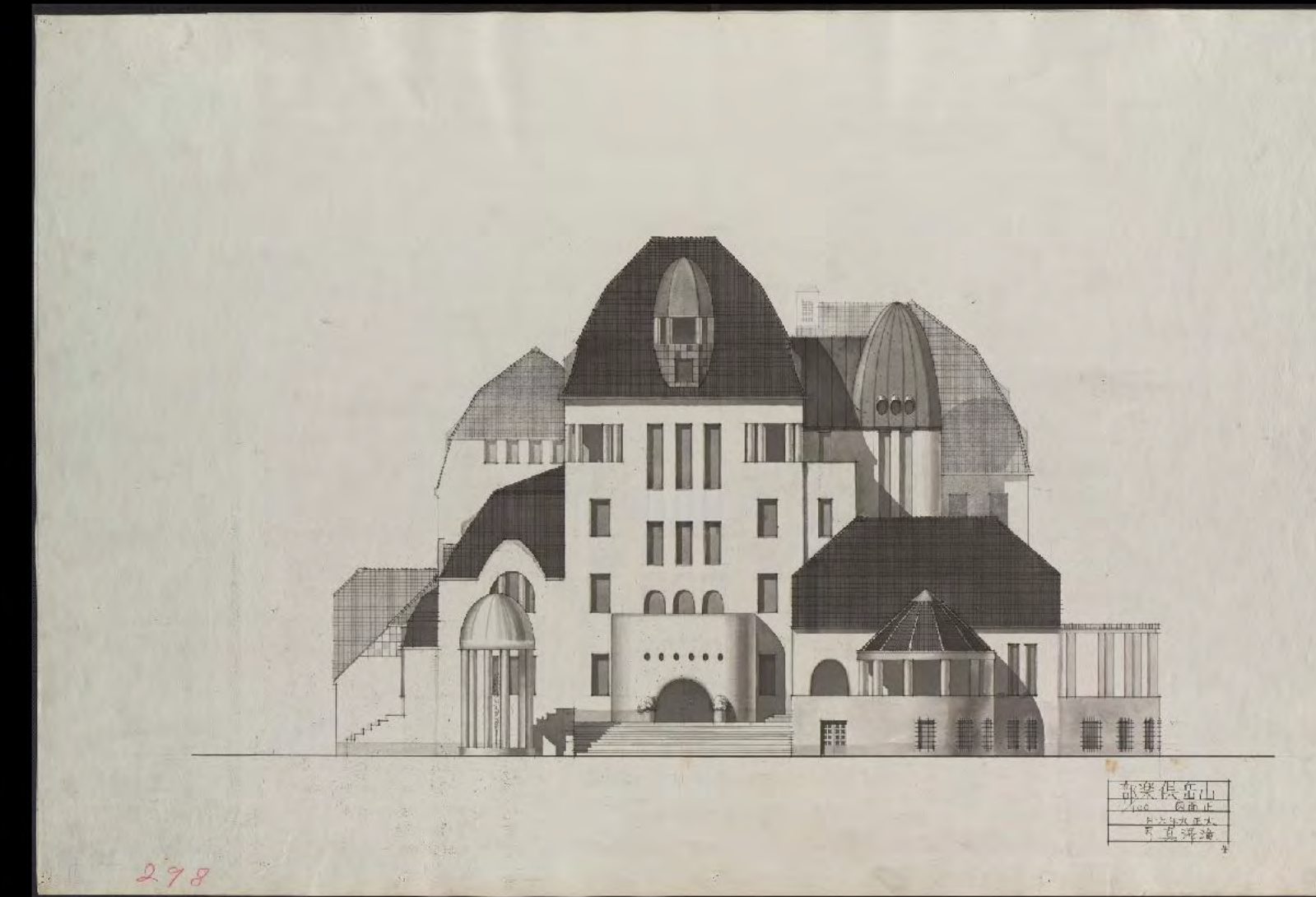
1926~

大内秀一郎
東京高等工業学校建築科長
阿部美樹志事務所



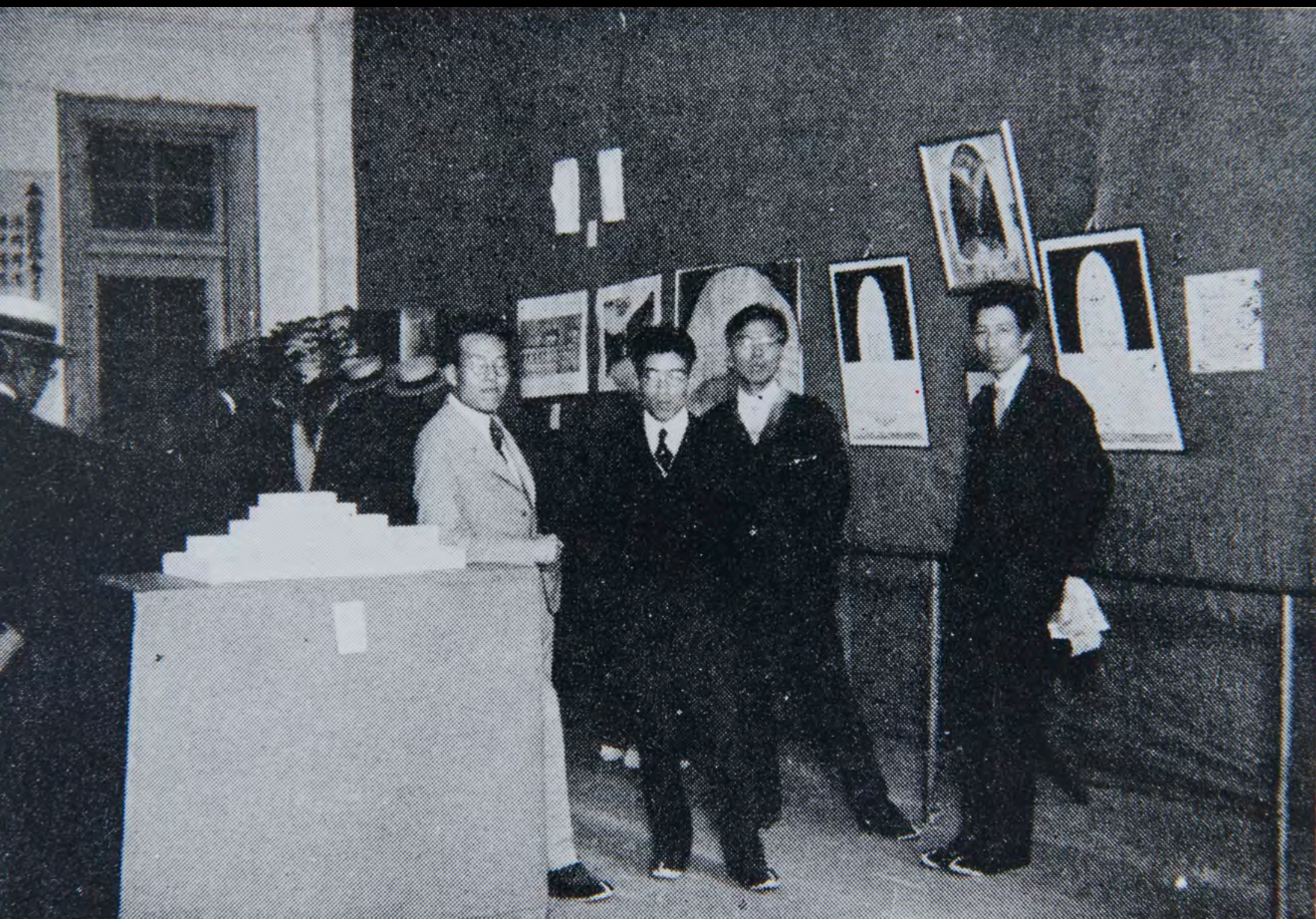
1920（大正9）年 **分離派建築会**結成
石本喜久治、堀口捨己、山田守、瀧澤眞弓、森田慶一、矢田茂が東京帝国大学建築学科を卒業。その後に、蔵田周忠、山口文象、大内秀一郎が途中から参加する。

分離派建築会とは？



6人は卒業制作の展示をきっかけに、
歴史的様式からの分離と新しい建築の
芸術的「創作」を唱え、**分離派建築会**
を結成した。

分離派建築会とは？



『分離派建築会 宣言と作品』

岩波書店、1920年

分離派建築会は
展覧会と出版によって
建築作品と建築論を発表

分離派建築会の宣言

我々は起つ。

過去建築圈より分離し、總の建築をして眞に意義あらしめる新建築圈を創造せんがために。

我々は起つ。

過去建築圈内に眠つて居る總のものを目覺さんために、溺れつゝある總のものを救はんがために。

我々は起つ。

我々の此理想の實現のためには我々の總のものを愉悅の中に獻げ、倒るゝまで、死にまでを期して。

我々一同、右を世界に向つて宣言する。

分 離 派 建 築 會

展覧会

出版

- 1920 第1回作品展
- 1921 第2回作品展
- 1922 第1回関西展覧会
- 1923 第3回作品展

- 『分離派建築会 宣言と作品』
- 『分離派建築会の作品 第二』

〈関東大震災〉

- 1924 第4回作品展
第2回関西展覧会

- 『分離派建築会作品 第三』

- 1926 第5回作品展

- 『建築新潮』 第5回展覧会作品号

〈昭和改元〉

- 1927 第6回作品展
- 1928 第7回作品展

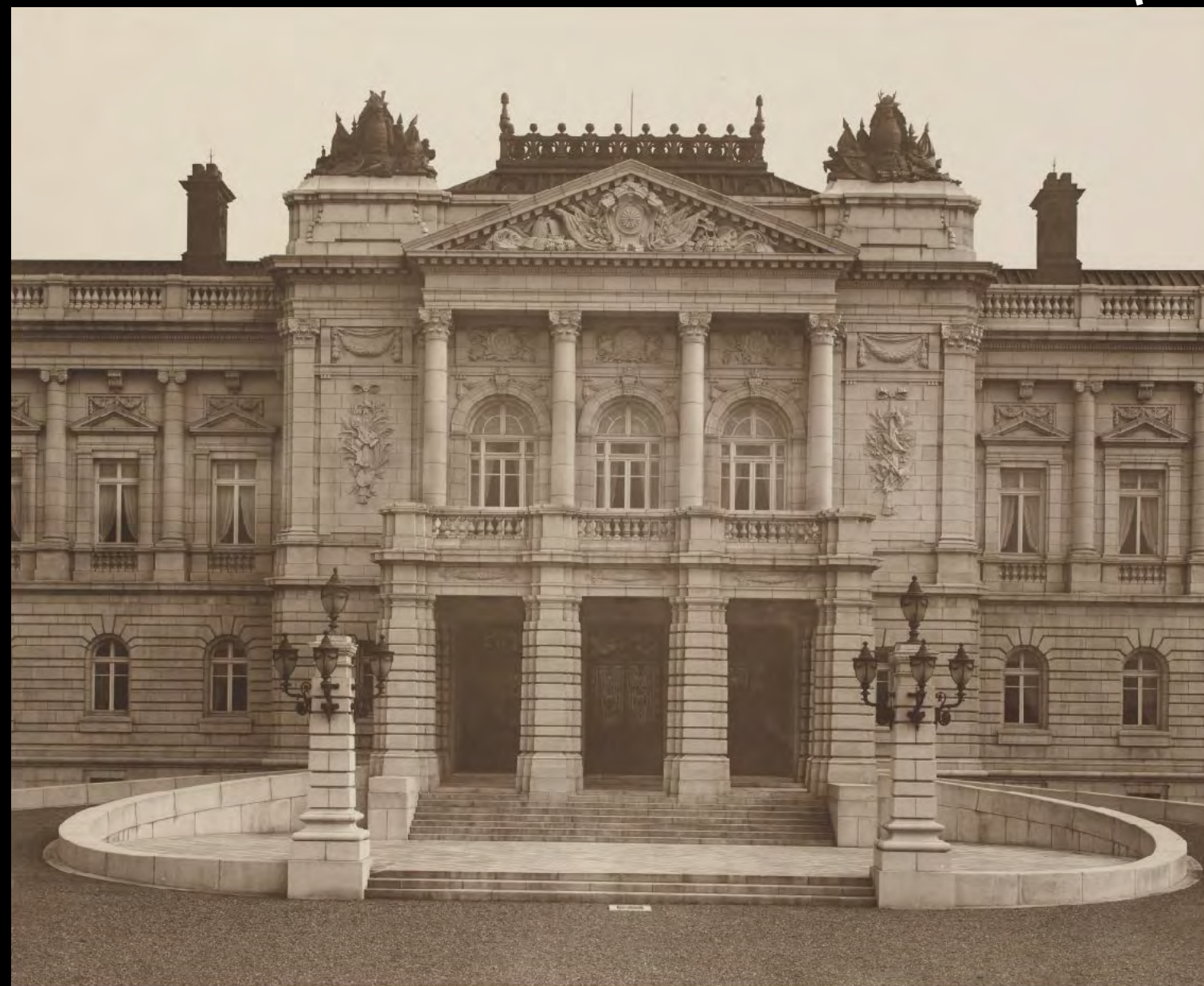
- 『建築新潮』 第6回展覧会作品号
- 『建築新潮』 第7回展覧会作品号

1920年の発足以来、

関東大震災を挟んで1928年まで活動を続けた

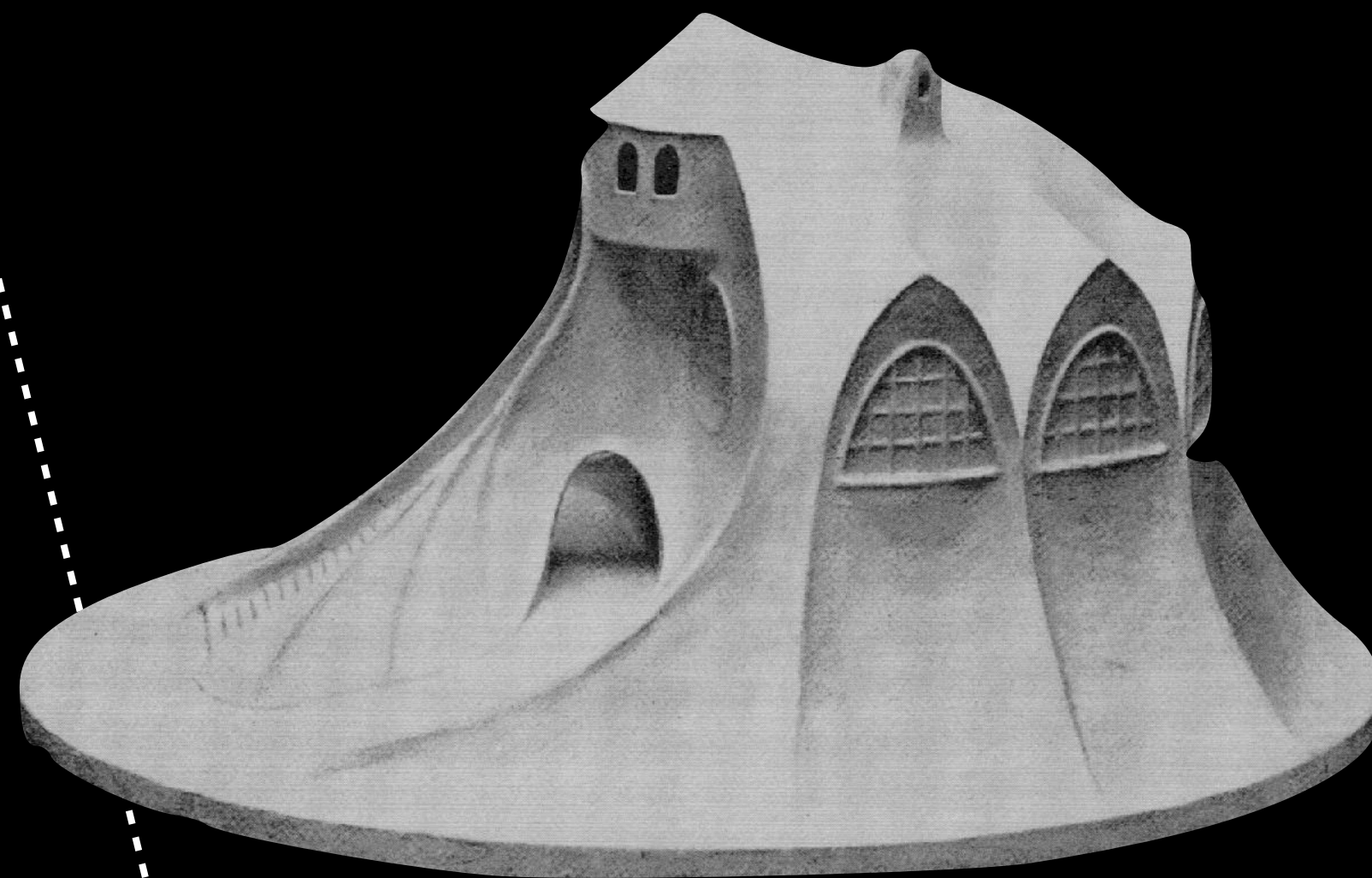
モダニズム建築受容の激変の時代に、 分離派建築会はいったい何を考えたのか

1909



片山東熊「東宮御所」
1909年（明治42年）

1921



瀧澤真弓「山の家」
『分離派建築会の作品 第二』 1921

1931



石本喜久治「白木屋百貨店」
1931年（『建築写真類聚』 8期2号）

1920

分離派建築会結成

分離派100年研究会の目的

分離派建築会の活動の全貌の解明

なぜ調査が必要なのか？

- 震災, 戦災, 建て替えにより建築作品や資料が消失している
- 駆け出しの建築家のため、そもそも実現した作品が少ない
またアンビルドのプロジェクトが多い
- ひとつのグループ活動ではなく、各自の活動であったため
個別建築家研究の総合が必要
- 芸術, 思想などの影響が強く、建築学外の知見が必要。

先行研究

長谷川堯

「日本の表現派 大正建築への一つの視点」

1968

- ・大正期建築史研究の嚆矢
- ・分離派建築会の芸術志向を強調

分離派建築会メンバーによる論考の幅広い文献調査を行っている。しかし、各メンバーの活動や建築作品の調査は限られている。また、時代背景や芸術・思想との影響関係をふまえた客観的歴史記述というより、独自視点からの評論的な性格がつよい。



長谷川堯『神殿か獄舎か』1972

活動の概要

2012-2015
第1期 研究会

2016-2020
第2期 連続シンポジウム

2015-2020
資料調査

2017-2020
展覧会企画

2018-2020
論考集編集

2019-2020
図録編集

2020
展覧会

研究調査

分離派100年研究会

- 資料の調査
 図面、現存建物などの調査
- 分析と考察
 研究会とシンポジウム



成果公表

分離派100年研究会

- 論考集の刊行

パナソニック汐留美術館

京都国立近代美術館

(学術協力：分離派100年研究会)

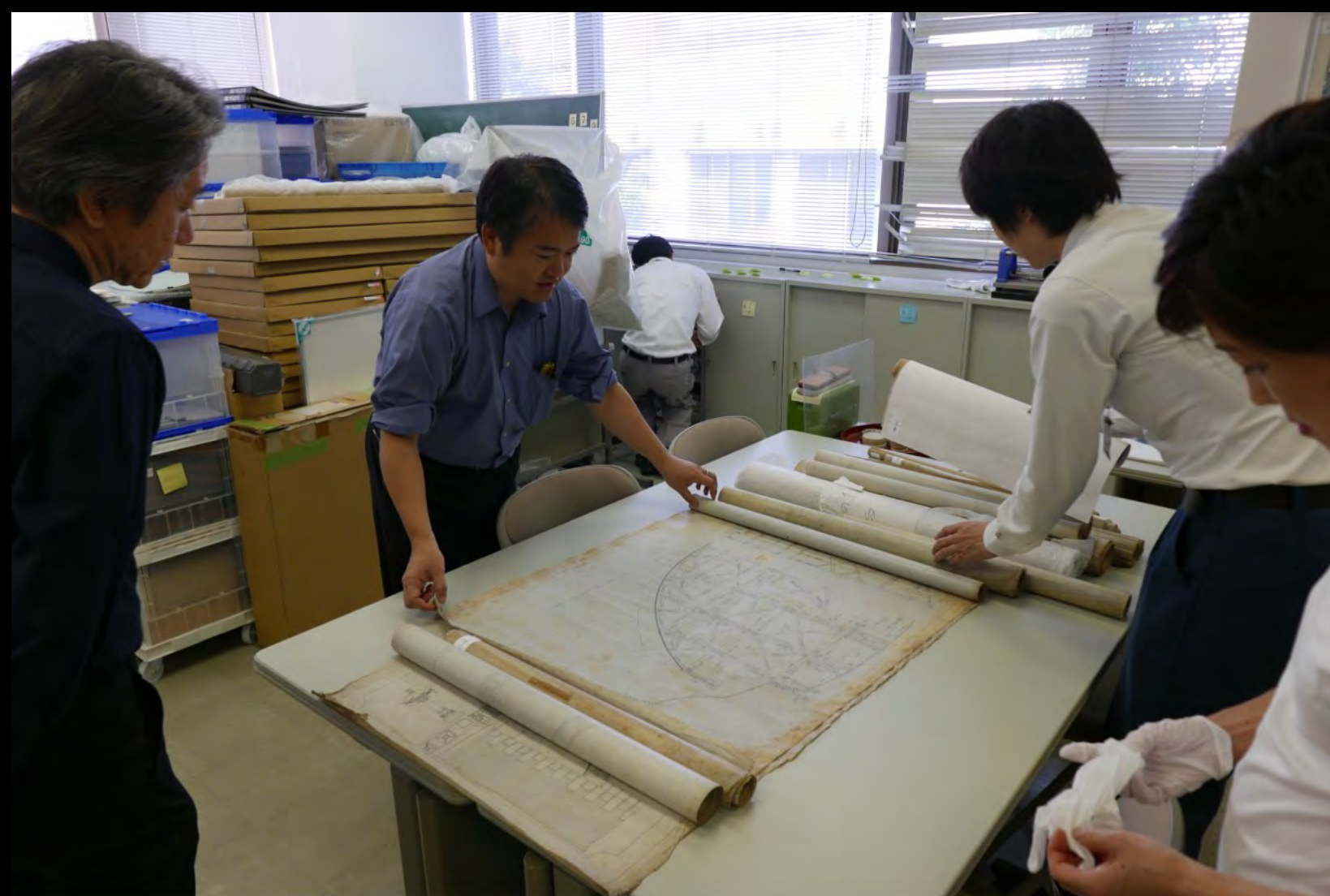
- 展覧会
- 図録編集



研究調査

分離派100年研究会

- **資料の調査**
図面、現存建物などの調査
- 分析と考察
研究会とシンポジウム



山田守資料 | 東京都土木技術支援・
人材育成センター 2019.10.7

分離派建築会に関連する資料は、様々な機関に分散して保管されているものが多く、未公開あるいは未整理のものも少なくない。研究会では網羅的な資料調査を行い、図面、写真、模型、文書等の発見に努めた。

おもな調査箇所

- | | |
|--------------|--|
| [東京帝国大学卒業設計] | 東京大学 |
| [石本喜久治資料] | 石本建築事務所社屋 |
| [堀口捨己資料] | 明治大学生田図書館 |
| [山田守資料] | 東海大学学園史料センター、山田守自邸、
NTTファシリティーズイノベーションセンター
郵政博物館、日本建築学会、東京都建設局
上田市美術館 |
| [瀧澤真弓資料] | 清水建設社屋 |
| [矢田茂資料] | アール・アイ・エー社屋、東京大学 |
| [山口文象資料] | 東京都市大学蔵田周忠文庫、旧多摩聖蹟記念館
渋谷聖公会聖ミカエル教会、旧米川邸 |
| [蔵田周忠資料] | |
| [大内秀一郎資料] | 大内遺族、大阪市電気科学館 |

研究調査

分離派100年研究会

- **資料の調査**
図面、現存建物などの調査
- **分析と考察**
研究会とシンポジウム

分離派建築会の多様な制作活動と思想の解明には、建築家ごとの個別研究を総合する必要があった。そのために研究会とシンポジウムを開催し、外部の研究者も招いて情報交換と討議を行った。

第1期 2012年～2015年

少人数の研究会

東京大学と京都大学で交互に開催 報告者は17名

第2期 2016年～2020年

公開の連続シンポジウム 報告者32名

研究調査

分離派100年研究会

- 資料の調査
- 図面、現存建物などの調査
- 分析と考察
- 研究会とシンポジウム



第1期 研究会（2012年～2015年）

第1回 2012.10.27 東京大学工学部1号館

長谷川章「青島の〈改革建築〉と日本分離派」

田所辰之助「ヴィルヘルム帝政期における建築とデザインの改革」

第2回 2012.11.24 京都大学楽友会館

本田昌昭「1910－20年代のオランダの建築的状況」

中江研「ヴァイマル期ドイツにおける労働者住宅建設と建築家」

第3回 2013.6.1 東京大学工学部1号館

岩岡竜夫・大宮司勝弘「分離派からインターナショナル・スタイルへ
— 山田守の戦前の建築作品を通して」

角田真弓「分離派建築会結成の背景」

第4回 2013.11.17 京都大学百周年時計台記念館

加藤哲弘「大正期日本の美学の研究方法論について」

田路貴浩「森田慶一思想形成 — 構造・ウィトルウィウス・ヴァレリー」

研究調査

分離派100年研究会

- **資料の調査**
図面、現存建物などの調査
- **分析と考察**
研究会とシンポジウム



第5回 2014.7.13 | 京都大学工学部3号館

松崎照明 「堀口捨己の茶室 — 研究と作品」

近藤康子 「堀口捨己の建築論 — 茶室の〈機能〉と〈表現〉をめぐって」

第6回 2014.11.1 | 東京大学工学部1号館

岸佑 「岸田日出刀の近代性とその諸相」

勝原基貴 「岸田日出刀の建築意匠学確立に向けた取り組み」

第7回 2015.7.5 | 東京大学工学部1号館

佐藤美弥 「創宇社と分離派の距離について — 山口文象を中心に」

岡山理香 「蔵田周忠 — 分離派の〈分離派〉として」

第8回 2015.9.14 | 京都大学工学部3号館

杉山真魚 「分離派建築会とウィリアム・モリス」

江本弘 「〈ジョン・ラスキン〉とは誰か」

研究調査

分離派100年研究会

- 資料の調査
 - 図面、現存建物などの調査
 - 分析と考察
- ### 研究会とシンポジウム



第1回 〈分離派〉とは何か
東京大学工学部1号館15号講義室

第2期 シンポジウム「分離派建築会誕生100年を考える」(2016年～2020年)

分離派建築会を捉える試みとして、各回テーマを設定した

第1回 〈分離派〉とは何か 2016.10.30 東京大学工学部1号館15号講義室

池田祐子「分離派の誕生 — ミュンヘン、ウィーンそしてベルリン」

水沢勉「分離派と日本美術のモダニズム」

河田智成「分離派の建築的背景 — ゼムパーからヴァーグナーへ」

足立裕司「アーツ・アンド・クラフツ運動以降の西欧の動向と日本への影響について」

福田晴虔（コメント）

第2回 分離派建築会発足と〈創作〉の誕生 2017.7.8 京都大学時計台記念館

長谷川堯「〈自己の拡充〉の意義 — 後藤慶二から分離派へ」

南明日香「大正期の美術における〈創作〉意識」

飯嶋裕治「分離派建築会の思想史的背景 — 和辻哲郎を中心に」

笠原一人「武田五一のセセッション受容と創作」

研究調査

分離派100年研究会

- 資料の調査
- 図面、現存建物などの調査
- 分析と考察
- 研究会とシンポジウム



第1回 〈分離派〉とは何か
東京大学工学部1号館15号講義室

第3回 メディアと建築家 — 博覧会と商業主義のただ中で

2017.11.5 東京大学工学部1号館15号講義室

河東義之「ゼツェッションの導入とその意義」

天内大樹「平和記念東京博覧会の〈分離派式〉」

内田青蔵「〈文化住宅〉を生み出した平和博の〈文化村〉」

橋爪節也「大阪のイマジジュリィにおける分離派的なるもの — 盛り場と沿線モダニズム」

第4回 分離派建築会と〈田園的なもの〉

2018.6.16 京都大学楽友会館

杉山真魚「〈田園〉をめぐる思想の見取り図」

菊地潤「瀧澤真弓設計〈日本農民美術研究所〉」

鞍田崇「ノイズとしての〈田園〉 — 民藝運動とその時代」

田路貴浩「堀口捨巳のまなざしと心性」

第5回 分離派時代の建築教育と建築構造

2018.11.3 東京大学工学部1号館15号講義室

加藤耕一「分離派誕生の背景としての東京帝国大学」

角田真弓「東京帝国大学の建築教育」

宮谷慶一「〈構造〉的側面と職能」

堀勇良「鉄筋コンクリート建築黎明期の諸問題」

研究調査

分離派100年研究会

- **資料の調査**
図面、現存建物などの調査
- **分析と考察**
研究会とシンポジウム



第1回 〈分離派〉とは何か
東京大学工学部1号館15号講義室

第6回 分離派建築会の造形 — 建築と彫刻の交差

2019.5.25 西陣産業創造会館

田中修二 「大正—昭和前期の彫刻家にとっての建築」

大宮司勝弘 「山田守の創作法」

菊地潤 「石本喜久治の渡欧」

天内大樹 「分離派建築会の〈芸術〉 — 領域の確保と霧消」

第7回 新しい都市と社会をめざして

2019.10.26 東京都市大学世田谷キャンパス6号館

岡山理香 「蔵田周忠の実験的活動」

梅宮弘光 「川喜田煉七郎におけるリアリティの行方」

佐藤美弥 「山口文象と創宇社建築会の建築認識」

田所辰之助 「〈都市〉に託されたもの — 滞独時代の山口文象の軌跡」

第8回 分離派建築会以後 — それぞれのモダニズム

2020.8.10 オンライン

市川秀和 「森田慶一のウィトルウィウス論」

本橋仁 「自由無礙なる様式の発見 — 板垣鷹穂・堀口捨己・西川一草亭」

近藤康子 「堀口捨己による様式への問いと茶室への逆行」

勝原基貴 「オットー・ワグナー十年祭と近代建築理解」

田路貴浩編

分離派建築会 日本のモダニズム建築誕生

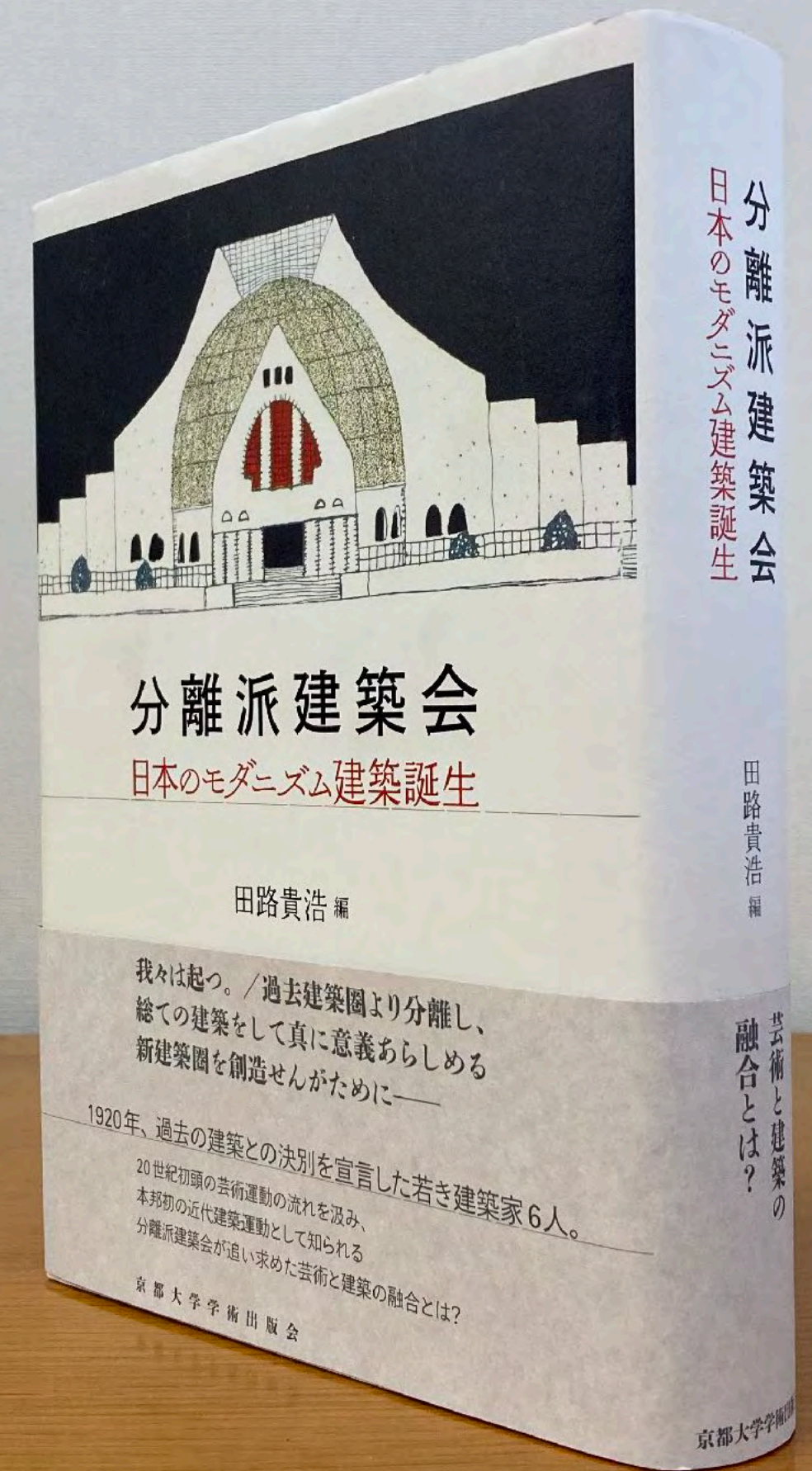
京都大学学術出版会, 2020年, 592頁

2012年に始まった調査・研究の成果

執筆者は、研究会・シンポジウムでの発表と議論をへて論考をまとめた。

執筆者は研究会メンバーのほか、連続シンポジウムに招待した哲学、思想史、美術史の専門家を含む29名。

全8章で、32本の論考を収録。



分離派の誕生——ミュンヘン、ベルリンそしてウィーン——池田祐子
オットー・ヴァーグナーの時代の建築芸術——被覆とラウム、そして、生活へ——河田智成
分離派と日本 分光と鏡像——雑誌『青鞥』創刊号表紙絵をきっかけに——水沢勉
青島とドイツ表現主義——長谷川章

II 結成、または建築「創作」の誕生

分離派建築会と建築「創作」の誕生——田路貴浩
一九一〇年前後の美術における「創作」意識——南明日香
分離派建築会の「建築・芸術の思想」とその思想史的背景——和辻哲郎との照応関係から——飯嶋裕治
分離派への道程——世代間の制作理念からの再考——足立裕司

III 〈構造〉対〈意匠〉?

日本における初期鉄筋コンクリート建築の諸問題——堀勇良
分離派登場の背景としての東京帝国大学——加藤耕一
東京帝国大学における建築教育の再読——学生時代における建築受容の様相——角田真弓
「構造」と「意匠」および建築家の職能の分離——宮谷慶一

IV 大衆消費社会のなかでの「創作」

ゼツェション（分離派）の導入——河東義之
博覧会における建築様式——分離派建築会の前後——天内大樹
「文化住宅」にみる住宅デザインの多様性の意味——内田青蔵
大大阪モダニズムと分離派——街に浸透する美意識——橋爪節也

V 建築における「田園的なもの」

「田園」をめぐる思想の見取り図——杉山真魚
瀧澤真弓と中世主義——《日本農民美術研究所》の設計を通して——菊地潤
堀口捨己の田園へのまなざし——田路貴浩
堀口捨己と民藝——常滑陶芸研究所と民藝館を糸口に——鞍田崇

VI 彫刻へのまなざし

大正と昭和前期の彫刻家にとっての建築——田中修二
「リズム」から構想された建築造形——天内大樹
山田守の創作法——東京中央電信局および聖橋の放物線の出現とその意味——大宮司勝弘
石本喜久治の渡欧と創作——あるいは二〇世紀芸術と建築の接近——菊地潤

III 〈構造〉対〈意匠〉?

日本における初期鉄筋コンクリート建築の諸問題—堀勇良
分離派登場の背景としての東京帝国大学—加藤耕一
東京帝国大学における建築教育の再読—学生時代における建築受容の様相—角田真弓
「構造」と「意匠」および建築家の職能の分離—宮谷慶一

IV 大衆消費社会のなかでの「創作」

ゼツエション（分離派）の導入—河東義之
博覧会における建築様式—分離派建築会の前後—天内大樹
「文化住宅」にみる住宅デザインの多様性の意味—内田青蔵
大大阪モダニズムと分離派—街に浸透する美意識—橋爪節也

V 建築における「田園的なもの」

「田園」をめぐる思想の見取り図—杉山真魚
瀧澤真弓と中世主義—《日本農民美術研究所》の設計を通して—菊地潤
堀口捨己の田園へのまなざし—田路貴浩
堀口捨己と民藝—常滑陶芸研究所と民藝館を糸口に—鞍田崇

VI 彫刻へのまなざし

大正と昭和前期の彫刻家にとっての建築—田中修二
「リズム」から構想された建築造形—天内大樹
山田守の創作法—東京中央電信局および聖橋の放物線の出現とその意味—大宮司勝弘
石本喜久治の渡欧と創作—あるいは二〇世紀芸術と建築の接近—菊地潤

VII 「構成」への転回

創作活動の展開—蔵田周忠 分離派建築会から型面工房へ—岡山理香
創造・構成・実践—山口文象と創宇社建築会の意識について—佐藤美弥
「新しき社会技術」の獲得へ向けて—山口文象の渡独とその背景をめぐって—田所辰之助
表現から構成へ—川喜田煉七郎におけるリアリティの行方—梅宮弘光

VIII 散開、そして「様式」再考

古典建築の探究から様式の超克へ—森田慶一のウイトルウィウス論をとおして—市川秀和
オットー・ワグナー十年祭と岸田日出刀の様式再考—「歴史的構造派」という視座をめぐって
堀口捨己による様式への問いと茶室への遡行—近藤康子
自由無礙なる様式の発見—板垣鷹穂・堀口捨己・西川一草亭—本橋仁

展覧会の開催

分離派建築会100年 建築は芸術か？

パナソニック汐留美術館
2020年10月10日—12月15日

京都国立近代美術館
2021年1月6日—3月7日

主催：パナソニック汐留美術館
京都国立近代美術館
朝日新聞社

学術協力：分離派100年研究会



東京会場

京都会場

我々は
起つ。



大正から
昭和、
模索する
若き
建築家たち



分離派建築会 100年

建築は芸術か Can Architecture Be Art?

2021年
1月6日(水) - 3月7日(日)

開催時間 9時30分-17時(金曜、土曜は20時まで)で入館は開館の30分前まで
休館日 毎週月曜日(12月31日(金)も)と、1月11日(日)は特別休館日
主催 京都国立近代美術館、分派建築会、分派建築会 分派建築会
後援 分派建築会、分派建築会、分派建築会、分派建築会、分派建築会、分派建築会
協賛 株式会社アルメイヒー 株式会社 石本建築事務所
協力 一般財団法人デジタル文化財創造機構
学術協力 分派建築会

京都国立近代美術館

January 6 - March 7, 2021
The National Museum of Modern Art, Kyoto

TEL: 075-9147471 <http://www.nmmak.go.jp/>



我々は
起つ。



大正から
昭和、
模索する
若き
建築家たち



分離派建築会 100年展

建築は芸術か Can Architecture Be Art?

2020年
10月10日(土) - 12月15日(火)

開催時間 午前9時30分-午後6時(土曜、日曜、12月11日(日)は特別休館日)
入館料 一般800円、65歳以上700円、大学生
中高校生400円、小学生200円、中学生200円、小学生100円、中学生100円
その他、本展覧会と併せて開催される「100 Years of Bunriha」展覧会もご覧いただけます。
お問い合わせ先 京都国立近代美術館 企画課 075-9147471
受付時間 午前9時30分-午後6時(土曜、日曜、12月11日(日)は特別休館日)
〒604-8503 京都府京都市中京区西本願寺町1-10
TEL: 075-9147471 <http://www.nmmak.go.jp/>

October 10 Saturday - December 15 Tuesday, 2020
Closed on Wednesdays
Admission 1020 yen - 650 yen (admission until 5:30 p.m.)
Adults 800 yen, 65+ 700 yen, University students
High school students 400 yen, Elementary school students 200 yen, Middle school students 200 yen, Elementary school students 100 yen, Middle school students 100 yen
For more information, please contact the National Museum of Modern Art, Kyoto, Planning Department, 075-9147471.
Opening hours 9:30 am - 6:00 pm (Closed on Wednesdays, 12/11/2020)
Address 1020-10, West Honanji-cho, Nakagyo-ku, Kyoto 604-8503, Japan
TEL: 075-9147471 <http://www.nmmak.go.jp/>
Please make the seat reservations for individual exhibitions in advance.
We take no responsibility for the special of COVID-19.



パナソニック
汐留美術館
Panasonic Shiodome Museum of Art
ROUNDED GALLERY

各会場ポスター
左：東京会場
右：京都会場

展覧会のテーマ

協同討議から、分離派建築会を捉える軸を導出

分離派建築会のテーマ **〈田園〉**

〈彫刻〉

〈構成〉

時代背景

〈都市化の進展と大衆消費社会の出現〉

〈関東大震災と鉄筋コンクリート造の普及〉

〈表現主義から合理主義への芸術思潮の変転〉

これらが織りなす錯綜体として分離派建築会の作品と思想を解き明かし、

たんなるエリートの芸術至上主義ではなく、

時代状況に深く関わりながら、

モダニズム建築を受容していったことを明らかにした。

展覧会の構成



東京帝大卒業制作、大学や企業のアーカイブ、美術館博物館から資料を収集。同時代の芸術作品や歴史をあわせて紹介することで、時代潮流との関係性を視覚的に分かりやすく提示した。

展覧会の構成



展示会場は、論考集でもとりあげた4つの視点を軸として構成
彫刻、田園、構成、震災、鉄筋コンクリート

展示用模型の制作



堀口捨己「紫烟荘」
明治大学理工学部建築学科 小林正美研究室



瀧澤眞弓「日本農民美術研究所」
菊地潤（研究会メンバー）

分離派建築会アンビルド作品のCG復元

SYMPHONY OF VOLUMES

企画	本橋仁
映像制作	戸村陽
CGモデリング	長澤寛
音楽制作	上村洋一
監修	田路貴浩



関連シンポジウム・講演会の開催

会期中、講演会やシンポジウムを開催し、
展覧会の紹介にとどまらず、新たな情報収集を継続し、
分離派建築会の現代的な意義について議論した。

2020.10.24 シンポジウム「大阪の石本喜久治」

菊地潤（研究会メンバー）、谷口嘉彦（石本建築事務所）、
松田修平（同左）、杉山浩二（同左）、磯達雄（建築ジャーナリスト）

2020.10.31 シンポジウム「分離派建築会—新しい様式を求めて」

香山壽夫（建築家）、藤岡洋保（建築史家）、田路貴浩（研究会メンバー）

2020.11.8 シンポジウム「分離派建築会と大正美術界」

大川三雄（建築史家）、水沢勉（神奈川県立近代美術館館長）、田所辰之助（研究会メンバー）

2021.1.9 シンポジウム「分離派建築会—モダニズム建築への道程」

田路貴浩（研究会メンバー）、加藤耕一（同左）、
足立裕司（神戸大学名誉教授）、梅宮弘光（神戸大学）

2021.1.16 講演会「〈ことば〉をもった大正時代の建築家たち」

本橋仁（研究会メンバー）

マンガ・リーフレット制作

研究者だけでなく広く一般に紹介することもねらいとして、マンガのリーフレットを作成した。このマンガを作成したY田Y子氏は、分離派建築会設立メンバーの山田守の孫にあたる。

マンガで見る!

分離派建築会 実録

エピソード

其の① 疾風怒濤の結成前夜の巻 Y田Y子

日本近代建築史をひも解くとき

必ずや言及される『分離派建築会』という活動がある

今からちょうど100年前

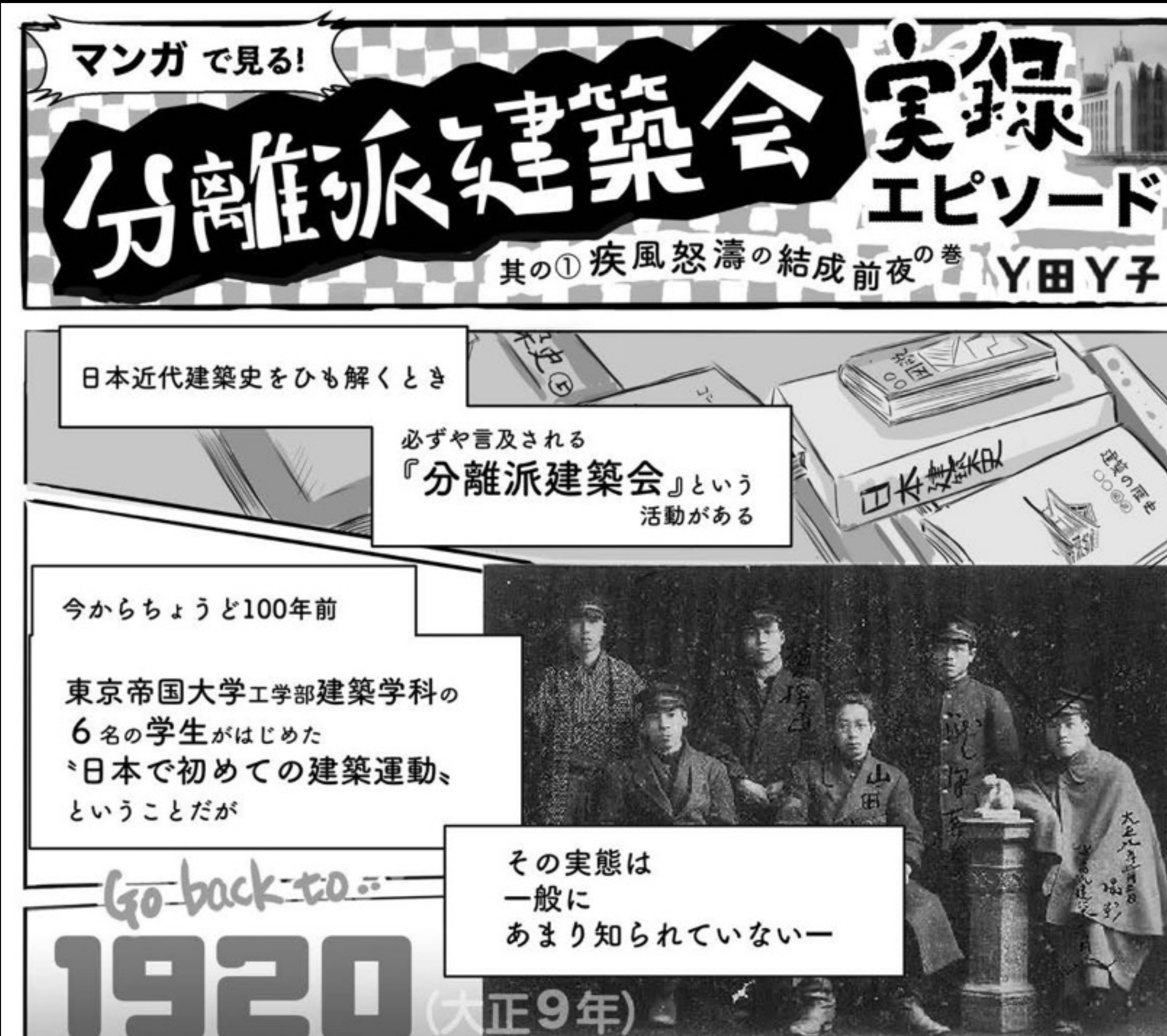
東京帝国大学工学部建築学科の6名の学生がはじめた
※日本で初めての建築運動、ということだが

Go back to...

1920

(大正9年)

その実態は一般にあまり知られていない



オンライン ギャラリーツアー

新型コロナウイルス感染対策による行動制限があったにもかかわらず、二会場で延べ26,063人の来場者と幅広い年齢層の一般客をひきつけた。「ニコニコ美術館」のオンライン展覧会解説番組は20,074人が視聴した。



「ニコニコ美術館」 2021.1.20 18:00放送開始 3時間48分

メディア掲載

メディアへの波及もあり、
合計334件のプレスの上り上げがあった。



NHK「日曜美術館 — アートシーン」2020.11.15放映

山田守 / 1927年 / 東京都千代田区・文京区 / 復興構想として当時の内務省が設計、山田はデザインに関与した。支柱間3カ所の連続アーチのリズムは、裝飾を排した新しい造形表現となっている

建築は芸術だ 分離派建築会

100年前の若者たちの建築運動

大正時代、日本の建築界に彗星のごとく現れた、若き建築家の一団があった。1920年、東京帝国大学建築学科の卒業を控えた若者たちによる「分離派建築会」。

今も残る彼らの貴重な作品を軸に、その活動を振り返る。

「我々は起つ。過去建築界より分離し、純粋な建築をして真に意義あらしめる新建築家を創造せんがために」

情熱あふれるこの文章は、日本初の近代建築運動「分離派建築会」(以下、分離派)の宣言文だ。

分離派の結成から100年目となる今年、東京・パナソニック汐留美術館では、「分離派建築会100年展 建築は芸術か？」が開催中(12月15日まで)だ。図面、模型、写真、映像、さらに関連する美術作品計160点によって、変革の時代を鮮やかに駆け抜けた彼らの軌跡を振り返るものとなっている。

大正から昭和にかけて、新しい建築のあり方を模索した分離派の作品の中には、僅かだが残っているものがある。たとえば御茶ノ水のランドマークとなっている聖橋(1)。1927年に完成した、美しいアーチを持つこの橋は関東大震災後、「復興管線」の一つとして、戦後33

歳の建築家・山田守によってデザインされた。隅田川にかかる永代橋も、同じく復興橋梁として山田がデザインしたものだ。

芸術としての建築

後に日本武道館、京都タワーなど数多くの名建築を設計する山田が若き日に参加していたのが、分離派だった。20年、同会は東京帝国大学(現、東京大学)建築学科の卒業を控えた6人の同期生、石本喜久治(2)、瀧澤眞司、堀口捨己、森田慶一(3)、矢田茂、そして山田守によって結成された。

日本の近代化の中で、建築も大きな変化をとげた。そこに登場したのが、「西洋の様式」をまねるのではなく、「独自の建築」を創作するべきだという分離派の若き建築家たちだ。

「過去の建築からの分離」を宣言した彼らは、学内の第2学生控所で習作展を、続いて白木屋アパートで第1回作品展を開く。

photo 写真部・池 林葉子(47ページ) 朝日新聞社(京都府立大学建築会館) パナソニック汐留美術館提供(東京朝日新聞社社庫(複製))

Asahi Shimbun Weekly AERA 2020.12.14 46

朝日新聞社『AERA』2020.12.14

図録の刊行

分離派建築会100年 建築は芸術か？

朝日新聞社, 2020, 275頁

展覧会出品資料約160点をすべてカラーで掲載。また、研究調査の成果として研究会メンバーによる4本の論考を所収。英訳併記とし、海外読者にも対応した。

約3700冊の売り上げた。また、西岡勉氏によるブックデザインも高く評価された第62回全国カタログ展・経済産業大臣賞（最高賞）受賞した。



Bunriha Kenchiku Kai

Issues for Modernist Architecture

Takahiro Taji

A book titled *Shingeijutsu* (New Art) was published in 1916. This book was compiled as one in a series of books that discuss modern trends in various fields such as politics, society, and philosophy. For whatever reason, Sakuzo Yoshino, a political scientist known for the theory of Minponshugi (politics of the people), authored the volume for art. It is curious that a political scientist would write about art, but in fact, he quite accurately captured the trends in the art world at that time.

New beliefs in scientism and ideologies that abolished old customs emerged mainly in the nineteenth century, bringing tremendous change to all aspects of society. In particular, conventional styles that had been visible in the art world were completely overthrown. ...We see a variety of assorted principles and schools sprout up in the morning and wither in the evening. There is the so-called Impressionism, the so-called Neo-Impressionism, the so-called Cubism, the so-called Futurism, the so-called Post-Impressionism, the so-called this, and the so-called that. [The situation is] so vast and chaotic that one cannot tell what is right and what is wrong.¹

This passage succinctly expressed the chaotic art world of the period. Rejection of old, traditional art erupted all over Europe in many different forms. Some declared their positions and began their own movements, perhaps after being inspired by the Communist Manifesto (1848) of Marx and Engels. These movements included the declaration of Futurism made by Marinetti of Italy in 1909, the Bauhaus manifesto by Gropius of Germany in 1919, and the proclamation of Realism by Naum Gabo of the newly formed USSR in 1920.

Rebellions against the art establishment broke out in all parts of Europe. In 1892, a group in Munich sparked excitement when it denounced government-supported art and called itself the Secession. This wave spread to Vienna where Gustav Klimt and others formed the Vienna Secession movement in 1897. A great transformation took place to usher an era that broke away from the old art establishment.

Let's now look at what was happening in Japan. In 1920, six young men graduated from the Tokyo Imperial University's Department of Architecture. These young men, Kikuji Ishimoto, Sutemi Horiguchi, Mamoru Yamada, Mayumi Takizawa, Keiichi Morita, and Shizuo Yoda,

they were active, they followed the ever-changing trends in Europe, and worked to introduce the latest art styles. In the 1930's, several years after the group ceased its activities, members were building Modernist architecture devoted to creating the launch pad for Modern architecture. Kikuji Ishimoto became the founder of a major design firm, Architectural & Engineering Firm, Inc., and Bunzo Yamada was the founder of RIA. Mamoru Yamada designed the Imperial Palace, the dokan as well as Kyoto Tower, and also founded the Department of Architecture. Another person that became prominent at university is Sutemi Horiguchi, who started the Department of Architecture at Meiji University, and also pioneered the field of architectural history. In the field of research, Kikuji introduced the first Japanese translation of the oldest architectural treatise in the Western world, *De architectura* by Vitruvius, an important contribution to Japan's acceptance of Western architecture. Kurata taught at the Musashi Institute of Technology (now City University) and Mayumi Takizawa at Osaka City University.

Bunriha Kenchiku Kai declared their secession from traditional architecture styles, which by then had become mainstream. The Meiji Government had enthusiastically embraced Western architectural styles as part of its Europeanization policy. Its grandest achievement was the Akasaka Palace, a perfect Baroque building. The study of architectural styles had come to fruition in the Meiji era. Having gained confidence, people's sentiment shifted towards nationalism, and with the commission of the Imperial Palace in 1910 providing a boost to the national mood, the creation of uniquely Japanese styles gained momentum. New and trendy styles such as Art Nouveau and Secessionism followed by the disassembling of proper Western architecture and the emergence of eclectic styles. Simultaneously, the frame and reinforced concrete was being promoted. Structural technologies also bolstered the search for new architectural forms. In addition, shock waves from the Russian Revolution that reached Japan's architectural world, causing the change from government buildings to facilities for

図録はバイリンガルとし、
海外への情報発信も行った。
とくに論考、年表、作品および
文献リストなどは、外国人
研究者にとって貴重な情報源
となるだろう。

共同研究による分離派建築会の活動実態の解明

本研究活動はこれまでの個別建築家研究を横断し、さらに新たな情報を収集し、また、同時代の美術や思想へ関心の広がりを追跡することで、グループとしての思想のダイナミックな展開を捉え、〈彫刻〉〈田園〉〈構成〉など、分離派建築会を評価する視座を提示した。

こうして明治様式建築と昭和モダニズム建築のあいだでミッシングリンクとも言われる、わが国モダニズム建築の初期受容過程を明らかにすることで、近代建築史研究に大きく貢献した。